別記様式第４号

平成 30 年度 地域貢献研究助成費 実績報告書

平成 31 年３月 25 日

<table>
<tr><td>報　告　者</td><td>学科名</td><td>保健福祉学科</td><td>職 名</td><td>准教授</td><td>氏 名</td><td>新山順子</td></tr>
<tr><td>研 究 課 題</td><td colspan="6">現代舞踊の対話的鑑賞方法の開発と実践　―現代舞踊公演「DANCE ALIVE」を基盤として―</td></tr>
<tr><td rowspan="3">研 究 組 織</td><td colspan="2">氏　　名</td><td colspan="2">所 属 ・ 職</td><td>専 門 分 野</td><td>役　割　分　担</td></tr>
<tr><td>代表</td><td>新山順子</td><td colspan="2">岡山県立大学・准教授</td><td>舞踊教育学</td><td>実践・研究総括</td></tr>
<tr><td>分担者</td><td>岡本悦子</td><td colspan="2">就実大学・教授</td><td>舞踊芸術学</td><td>実践協力・研究評価</td></tr>
<tr><td>研究実績
の概要</td><td colspan="6">研究の概要
筆者らは，2016年より，特に<u>現代舞踊</u><u>（＝創造的なダンスは，舞台芸術の領域では現代舞踊と呼ばれる）</u>に着目して，生涯学習的視点による創作活動の継続の課題と支援に関する研究に着手した。2016・2017年度の実践により，舞踊公演が社会人の創作活動継続者にとって意義があることは事後評価等により，明らかになった。しかし，現代舞踊の地域への浸透・理解は未だ途上であり，引き続きワークショップ等，鑑賞者の関心・理解を促進させる対話的な工夫が必要であると考えられた。
2017 年度に実験的な試みとして，プログラム中に挿入した「トーク＆インプロダンス」等は，さらに精査する必要がある。そこで，<u>本研究では，より価値ある継続的な実践を目指し，地域から発信する現代舞踊公演を基盤として，出演者と鑑賞者が互いに学び合い交流する対話的な鑑賞方法を開発することを目的とした</u>。以上の研究成果は，地域の文化芸術の振興に広く寄与すると共に，社会人ダンス活動継続者の舞踊に向かう意識もコミュニケーションや共感に価値を見出す，より高次なものへと高まると考える。</td></tr>
</table>

※ 次ページに続く

研究実績の概要	**研究Ⅰ　2017 年の実践の課題を整理する** 本事業も3年目を迎えて，社会人の自己表現の場として他に例を見ない特色や独自性を確立しつつある。今後は，出演者の表現意欲を満足させるだけではなく，地域の創造的なダンス活動のリーダーとして現代舞踊の価値の浸透や鑑賞力を育む等，次世代へ繋ぐ場としてのより高い次元の可能性を模索するべきであると考えた。 **研究Ⅱ　現代舞踊公演を基盤とする対話的鑑賞の在り方を検討する** ワークショップや昨年度から試みている「トーク＆インプロダンス」（観客と交流するプログラム）は重要である。「作品を踊る⇒見る」という一方向の関係性だけではなく，参加型による双方向のやりとりによって作品への理解がより深まると考えられる。ワークショップの中では，短い作品を作り鑑賞し合う，またトーク＆インプロにおいては，デモ作品をより楽しく味わってもらう，等の対話的な鑑賞形式を積極的に試みることとした。 **研究Ⅲ　実践及び検証** 2018 年 10 月 21 日（日）に岡山県立大学リズムダンス室において，現代舞踊公演「DANCE ALIVE 2018」を開催した（昼・夜２回公演）。出演者数は 13 名，観客数は 120 名であった。ワークショップは，前日の 10 月 20 日（土）15 時～16 時に同会場で開催した（講師は土屋望氏）。このワークショップは，公演で上演する作品の主題に基づき，作者のイメージによる動きを体験するという趣旨で行った。グループによる作品創作では，作者の意図をふまえつつも，個性的な作品が創出され，創造的な学び合いの時間となった。公演では，８作品と「トーク＆インプロダンス」を上演した。トーク＆インプロは，作者へのインタビューと会場から即興でダンスのテーマを出してもらい，それを即興的にダンスにするという試みと共に，モノ（カラー積み木）を使ってより楽しく「見せる」展開を新たに工夫した。観客アンケートも好評であり，出演者の事後評価においても，交流を楽しみ，貴重な機会であると捉える意見等を得ることができた。 ワークショップの一場面 トーク＆インプロダンスの一場面 作品「やめないで少女」の一場面